

あやしい絵展

東京国立近代美術館 2021. 03. 23～05. 16 大阪歴史博物館 07. 03～08. 15



本展は、ミステリアス、退廃的、妖艶、神秘的、グロテスク、エロティックといった単語が当てはまる、美しいだけでは表現できない幕末～昭和初期に制作された絵画、版画、雑誌、絵本の挿絵などの作品を集めて「あやしい絵」として紹介されている。

“絵に潜む真実、のぞく勇氣はありますか？”とされ、怪しい絵画作品のユニークな企画である。

主な展示作品は、「上村松園」の《焰》(ポスター作品2週間限定展示)の他、下記の作品に加えて、西洋の「ミュシャ」「ロセッティ」「ビアズリー」らの日本画家に影響を与えた作品も紹介されている。



甲斐庄楠音 (かいのしょうただおと) 《横櫛》1916年頃 絹本着色

満開の牡丹花を描いた屏風を背に立つ女性の髪には大きな横櫛があり、しどけなく羽織った着物がはだけて緩やかな曲線を作りだし、刺青のように右肩部を飾る朱い長襦袢の役者絵が露わになっている。

上村松園 《花がたみ》(本画) 1915(大正4)年

音もなく散り行く紅葉の中、花籠を手に佇む女性の表情や姿態にはどこか尋常ならざるものがある。愛する人をひたすら追い求め、乱心を装う照日前に、その狂気を雅な風情の内に描き出そうとした「乱心」に挑んだ名作である。

橘 小夢 《安珍と清姫》大正末頃

「安珍清姫の悲哀物語」は、熊野の道成寺を舞台に繰り広げられたもので、「道成寺物」として、能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎などでよく知られている。